

九里学園の国際交流

アメリカ・インド・ザンビアの人達と交流して学ぶ

教諭 鈴木 精

通り、アメリカのセントジョーンズからの訪日団を四月に受け入れたことを始めとし、五月にインドから五十名の学生を受け入れ、さらに七月にインドへ本校生を十九名派遣、また、十月にはなんと、アフリカ、ザンビアからの訪日団を受け入れることができた。こんなにも多様で大規模な国際交流ができたことは、生徒たちにはもちろん、私たち教職員にとっても非常に刺激的な学びの多い交流だった。特にインド人とザンビア人との交流では、私たちが知らない世界を知ることができ、世界の多様性を肌で感じる事ができた貴重な時間であった。

これを契機とし、多方面から国際教育のレベルアップを図り、この地域における国際教育の先進校として、国際人を育成し、社会に貢献したいと思っている。



平成二十六年十月、東京で行われた全国私学教育研究大会のグローバル教育部門に参加した。その時、全国から集まった先生方と、各校の国際交流、海外研修などについて話し合ったのだが、本校の取り組みを紹介したところ、どの参加者からも感嘆の声が聞かれた。それは、本校の国際交流の取り組みが、日本でも有数のトップレベルにあることを示していた。今年は例年



セゾンファクトリー
総務部
シニアマネージャー

職場訪問

原料の苗作りから参加しています

S六十一年卒 松坂 聡 美さん

ガラス一面に雄大な奥羽山脈が見渡せる新しい社屋になった(株)セゾンファクトリーに、松坂聡美さんをお訪ねしました。

高校卒業後、一旦は地元企業に就職したものの自分の可能性を試したいと模索している時に、前社長を紹介され、企業理念や食へのこだわり等に感銘を受け入社。現在は総務課シニアマネージャーとしてお勤めです。お仕事は人事から商品開発まで多岐にわたります。最近ではテレビに取り上げられたことでマスコミ対応も増え、そのお陰で回線がパンクしそうなどの注文が殺到し、社員総出での対応に追われたそうです。

学生時代の思い出はなんとと言っても徹底した掃除で、一斗缶のワックスを臭いのを我慢しながら懸命に雑巾がポロポロになるほど塗り、冬は水代わりに窓から雪を廊下にいっぱい入れたり、夏は下の階に水漏れさせたりと担任の佳子先生によく怒られたと笑っていました。

その経験は今に活かされ、自分たちで出来ることは何でもやる理念から食品メーカーでありながら清掃会社に任せっきりにするのではなく、自分たちで毎日清掃しているそうです。トイレも素手で掃除し「寝ころべ」と言われたら出来ませよ。」と断言していらつしやいました。また、原料のバジルやイチゴなども苗作りから定植、水やり、収穫と農家さんに交じって交替で作業に参加しているそうで、この努力が商品の人気につながっているのだと感心しました。

これからも地元の素材を活かした新規事業やもつと多くの人が集まるお店作りをして地元へ恩返しをしていきたいとの夢を語っていらつしやいました。

帰りには社員全員のキビキビした清々しい挨拶に見送られ、心洗われる思いで帰路につきました。

(S五十九年卒 新井千香代記)